特集

経営者よ、現状に甘んじることなかれ

増収こそ作経営の王道

民主党政権が実現したことで、これまでの農業政策が転換することが予想されている。そして戸別所得補償制度を導入する代償として、米価がより一層下落し、60kgあたり１万円を割り込む可能性も現実的になってきた。稲作経営者にとっては厳しい状況である。しかし、「ピンチはチャンス」の格言もあるように、イノベーションを起こすきっかけにもなるのではないか。今回は、低米価時代を迎えればこそ新たな意味を持つ“増収”について考えていく。稲作経営者に向けての特集ではあるが、他作目の経営者も自らの経営を見直す契機になればと思う。

取材・文／編集部　イラスト／まるやまともや

「量」より「質」にとらわれすぎていないか？

10月30日に農水省が発表した平成21年産米の作況は98（10月15日付）でやや不良であった。総収穫量についても、全国平均で例年と比べて「やや不良」と予想し、主食用米の予想収穫量は、全体で８３１万１００ｔ。読者の中にも今年の収量に納得できない方もいらっしゃるであろう。

さて、今回の特集のテーマは、コメの増収である。本誌読者は、作目が何であれ、農業経営をことさらに特別視することなく、他業種の事業同様の経営感覚で取り組まなければならないと考えている方が多いはずである。そして持続的農業経営を確立するための原則は何かと、問われたら10人中９人が「増収増益」ときっと答えるだろう。しかし、稲作経営においては、増収によるコストダウン（増益）を考慮されることは少なかったように思う。

たしかに、統計だけを見ると、国内のコメの需要は減り続けている。１９６１年には１人あたり約１２０kgだったのが、近年では60kgに半減した。食糧供給が安定し、社会の論理も欠乏から過剰へ推移した。その厳然たる事実をもってすれば、稲作



経営者は多収を志向せず、良食味をあくまで追求するのも悪くないかのようにも思われる。69年以降、過剰相当分の作付けを禁じられた生産調整が行なわれたこともあって、農村社会内にコメの増収をタブー視する〝空気〟が漂っていたせいもあったのも、その一因といえるだろう。

しかし、増収増益は農業に限らず、あらゆる経営の王道なのである。今一度問い直してほしい。良食味と収量は、相反するものと勝手に決め込んでいなかっただろうか？　より多くの人に自分の作ったコメを届けたい、喜んでもらいたいという食の供給者としての素朴な喜びを忘れてしまっていなかっただろうか？　そして土に生きる者として、土の力を軽んじていなかっただろうか？

規制改革によって産地品種銘柄指定要件も緩和され、コメの作り手がブランドにもなりえるようになった。減反面積を拡大するという矛盾を引き起こすためにこれまでに省みられなかった、反収を増やすコメの新品種も誕生しつつある。

もちろん経営は多様であり、増収こそが絶対に正しいとはいえない。だが、民主党政権下で農政が転換し、稲作経営のあり方が変貌を遂げる可能性がある中で、あらためて増収の意味を考える必要があろう。

提言

農家がこぞって増収を目指した時代を思い起こそう

本誌05年7月号編集長インタビューにおいても増収を目指さない農業経営者を叱咤激励した菅野祥孝・スガノ農機㈱相談役。健全な栽培環境であれば、収量も増え品質が高いものができる実例を間近で見てきた菅野相談役から、固定観念に縛られない発想を持つことの大事さを聞いた。

工場へ働きに出る人間の都合で進んだ〝合理化〟

――先般、菅野相談役からお貸しいただいた『米作日本一20年史』(註1)という書籍が今回の特集を思いついたきっかけになります。戦後の食糧増産の社会的な要請のもとに、朝日新聞社と農林省、全中および各都道府県が一体になって、推進した事業です。1949(昭和24)年から1968(昭和43)年まで続きました。ちょうど生産調整が始まるのと軌を一にして、この事業は終わったわけですが、この本からは農民自らが新しい栽培技術に取り組んでいる様子が生き生きと伝わってきます。決してお上に指導される農民たちではありません。そして、反収18俵、1tどりを実現させたお百姓もいたわけです。しかし、今のコメ農家を考えてみるとどうでしょうか。たしかに時代は変わりました。一般的な物言いをすれば、量より質が求められています。しかし、お客様に直接販売していて、よりよいものをより安く提供したいと思っていても、増産増収を真剣に考えている農業経営者は、まだまだ少ないです。また、そのために新しい稲作の技術体系にどれだけ積極的に取り組んでいる方も、国内にはひと握りでしょう。温故知新という言葉がございますが、あの時代の気分をご存じの菅野相談役からこれから新しい時代を築いていかなければいけない農業経営者に向けてお言葉をいただきたいと思っています。

菅野祥孝(スガノ農機㈱相談役)

私がこの本を読んでの感想は、コメ中心で経営をやっておられるみなさんは、農業で食べていくことの夢や喜びを忘れてしまっているのではないかなぁと率直に思いましたね。そうなってしまったのには、それなりの理由があると思っています。水田の規模を拡大したら経営効率がよくなるといわれて、かえって苦労ばかりを背負い込んだケースが多いのではないでしょうか。農機代、人件費、自ら汗をかく代償に対する不安ばかりが募って、その先にある技術革新を考えることもできなくなってしまった。また、多くの方が日本特有の作業体系でやらなければいけない、そういう固定観念に縛られてしまっていることも大きく影響していると私は思っています。

――どういうことでしょうか。

菅野 稲作の作業体系が田植機を基準にしたものなんですね。重くしたら土に沈んでしまうと思い込んで、小さくて軽く低速のトラクターに乗る。ロータリーをつけて水田の土の表面を練るものですから、排水性も悪くなってしまうわけです。練ってしまえば、土の力は引き出されませんから、コメの収量も食味も落ちます。病気にもなりやすい。だから、効きがいい化学肥料を頼るようになる。農薬も使う。そしてコメの品種は化学肥料に反応しやすいものを開発するようになり、また同時に多肥栽培しても倒伏しにくい品種が出回るようになる。言ってみれば、作物を育つ条件ではなく、人間の都合なり思惑だけを追い求めたのが今日の結果なのではないでしょうか。

――「人間の都合」というのは、さっさと農作業を終えて工場に働きに出るという働き方を選んだ方々、兼業農家の都合ですよね。もちろん、あの時代においてはそういう選択肢もあって当然ですし、農村社会の中で多くの人がその道を選びました。

菅野 そのおかげで、農機業界、肥料業界、農薬業界は儲かったわけですが(苦笑)。また当時は、米価も高かったので、このままでいいんだと農業経営者も思い込んでしまったのではないですか。運動会を一生懸命走らなくてもいいよと言われてい



菅野 祥孝氏
スガノ農機㈱相談役

1933年生まれ。敗戦で旧満州より旧制中学2年で帰国。72年、スガノ農機㈱の3代目社長に就任。80年、日本のプラウ開発を目指し、茨城県土浦市に進出。2005年、相談役に就任。07年、北海道功労賞を受賞。

るようなものですからね。

――ソフィア・ローレン主演で『苦い米』というイタリア映画がありますが、あの時代はどこの国でも田植えをしていた。だけど、いまだに先進国で稲を移植して栽培しているのは日本、そして韓国だけです。他の国々では直播が一般的な技術になっています。もちろん、生産調整もあり、高米価だったという時代背景があったことは否めません。ただ、これから世界と競争をしていくにあたっては、日本独自の技術体系から脱却し、世界と共通の技術を導入すること、不可欠にならざるをえません。

昔からの栽培技術に学ぶべきことは多い

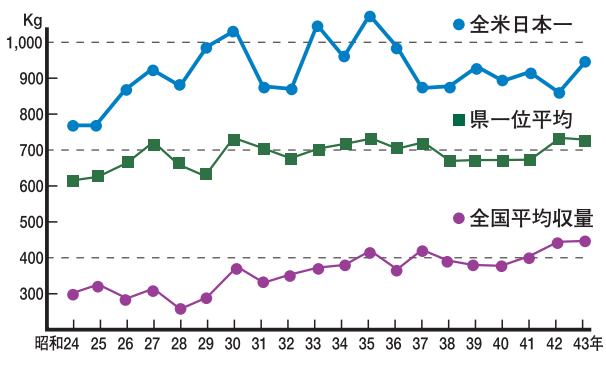
――最近、ハイブリッド米・みつひかり（註2）を試験栽培していた読者から「反収で13俵とれた。来年から本格的に始めようと思う」という声が寄せられました。外食業の評価として、食味はコシヒカリと遜色ないという意見が増えていますし、私自身も試食してそう感じています。ただ、かつては13俵どころか、1tどりできていた方がいたのも事実なのです。品種も多収米かつ質より量が重視されていた時代だとはいえ、あの戦後間もない時代において平均収量の倍以上を収穫している先人たちがいたことに、素直に驚きと称賛の気持ちを持たれるでしょう。

菅野 当時で反収18俵ですからね。今の品種で、黙ってても13～14俵をとれることに満足していては困りますね。もっともっと頑張っていただかないと。それに増収すれば、コストダウンどころか、同じコストで利益が何十パーセントで増えるわけです。これから米価が1万円を切るなどと言われていますけど、増収すればたとえ1万円切る事態が来たとしても怖くないじゃないですか。

――今と比べてかつての農家は、深耕に対する科学的な裏付けを持っていたわけではありませんでしたよね。

菅野 土を練りすぎることによる生産性低下の弊害、それを克服する不練栽培は北海道庁農務部と北農中央会で活躍された、水稲専門家の原正市先生（註3）に教えを請けました。

日本一、県一位平均、全国平均収量の推移（米作日本一20年史より）



昔から不練栽培（註4）はありましたし、プラウがあったからというわけではないのです。

――北海道は洋鋤で、本州は和鋤、ロータリー文化だとよくおっしゃっていましたね。プラウ、サブソイラを使う意味がなかなか分かってもらえず、「イスラム教徒を仏教徒に回収させるぐらい大変だなぁ」と嘆いていられたのを思い出します。ですが、反転、心土破砕、乾土をするようになった我が読者たちは「播種は大雑把でもたいした問題はない」「コメも麦も同じなんだ」と一様に言います。要はきちっとした作土が重要だということに気付くようになったのですから、大きな進歩ですね。

菅野　「農業を好きだからとにかくやるんだ、俺は少々苦労するけど、面白い」……。こういったことは新しい作業体系の中でこそ思えるようになったんじゃないでしょうか。夢を持てる時代になったんじゃないでしょうか。農業の未来は明るい、私は心からそう思っていますよ。

――農水省が経営者だった時代は過ぎ、個々の農業経営者が再び時代をリードしていかなければなりません。量と質を二項対立で考えるのではなく、どちらも追うことこそこれからのコメ経営者には欠かせない姿勢だとあらためて思いました。ありがとうございました。

＜註1＞
朝日新聞社から刊行、現在は絶版。「はじめに」には「米作日本一とは、『米の収穫量の向上と卓越せる民間技術の進歩を記する』ことをその目的とした」事業とある。またこの事業がきっかけとなって、農林省に「稲作における土壌と水の特別研究」が組織されたとも。名実共に生産者がコメ作りをリードした時代だった空気が伝わってくる。

＜註2＞
三井化学㈱（現・三井化学アグロ㈱）が開発したハイブリット品種。全国平均で12〜13俵前後とれるなど、収量性が高い。大手外食企業も使うなど、食味についても一定の評価がある。
http://www.mitsui-agro.com/mitsuhikari/index.html

＜註3＞
1917年、北海道岩見沢市出身。北海道大学農学部卒業後、北海道庁入庁。74年農務部首席専門技術員を務めた後、北農中央会入り。82年、中国・黒竜江省へ水稲栽培の指導者として派遣される。以降全中国に水稲畑苗移植栽培技術の移転に努めた結果、全国の水田43％に普及、それによる増産は米で約1,300万tと試算される。日中両国での表彰多数。2002年没。

＜註4＞
スガノ農機提供資料『不練レーザー耕法』によると「稲の生育に最も悪い状態にする一つは、代かきのとき必要以上に土を練ってしまうことです。昔から土を練らず田を劣化させない栽培法を不練栽培と言われています」。本誌95年12月号では「新不練栽培の提案」という記事を掲載したので、一読いただきたい。

「農通コンサルティング」がみなさまの経営と暮らしを応援します！

こんな **ご相談・ご質問** に応えてきました。

Q

- **パートさんの労働保険加入**はどうすれば良いのでしょうか？
- **今入っている保険（生保・損保）**で、将来本当に大丈夫でしょうか？
- **個人事業**なのですが、**法人化**した方が良いのでしょうか？
- **農協以外で借入**をしたいのですが、どのような制度があるのでしょうか？
- **青色申告と白色申告**ではどちらが有利なのでしょうか？
- **将来の相続**について、今からどのような対処をしておくべきでしょうか？

実践的専門家集団による総合的な相談システム



統括チーフ・コンサルタント
藤田　秀一郎
ファイナンシャル・プランナー（CFP®）
千葉エフピー協同組合　代表理事
公的機関貯蓄相談員

農通コンサルティング
会員募集中!!

窓口1つで多様な相談・質問ができます！
相続／資産／経理／財務／法務／労務／年金／保険 の各相談
その他 法人設立・知的所有権訴訟・IT化 等の相談

詳しい資料をお送り致します
本誌綴じ込みの資料請求ハガキにチェックするだけ!!

■お問合せ・お申込みは　㈱農業技術通信社
月刊「農業経営者」農通コンサルティング 担当
0120-555-184　FAX03-3360-2698
Eメール：**cfp@farm-biz.co.jp**
ホームページ：**www.farm-biz.co.jp**

「農通コンサルティング」年会費（税別）

月刊「農業経営者」購読者 個人（組合・法人含）	￥30,000/年間（¥2,500/月）	非購読者	個人料金	￥60,000/年間（¥5,000/月）
			組合・法人料金	¥100,000/年間（¥8,333/月）

※書類作成・手続業務・訴訟時の弁護士費用等、業務内容によっては別料金がかかる場合がありますが、その場合には事前にご案内いたします。

COLUMN

アンケート コメ農家のあなたに聞く 増産増益、真剣に考え始めていますか？

戸別所得補償制度が導入されれば、本格的な低米価時代が始まると見る向きが多い。これまでの稲作経営が一変させられる可能性も出てきた。そこでコメ生産者である本誌読者を対象に、ファックスアンケートを行ない、今考えていることを聞いた。

Q1 ここ5年間の主食用米の反収（10aあたり収量）を教えてください。

●480kg（8俵）未満……9人
●480kg（8俵）以上540kg（9俵）未満……19人
●540kg（9俵）以上600kg（10俵）未満……19人
●600kg（10俵）以上660kg（11俵）未満……4人
●660kg（11俵）以上720kg（12俵）未満……1人
●720kg（12俵）以上……1人

Q2 稲作の経営戦略として主食用米の収量を上げて増収増益を考えていますか？ その理由は？

●考えている……34名
［その理由］
・耕作面積拡大は考えていないため。
・味にはこだわらなくてもいい、系統に出荷している分については増やしたい。
・売り先であるほとんどの外食業者は味よりも「質・安全、そして低価格」のコメを求めている。よって増収することがコスト削減につながる。たとえ味を上げても高値で買うことはない。
・生産コスト増に対して増収でカバーしないと、採算が取れない。
・毎日食べるコメが値が高いとお客様が困る。

●考えていない……19名
［その理由］
・増収を狙うと食味が落ちる。
・野菜類に力を入れているので、コメに回す余力がない。また栽培に適さない条件の悪い水田にコメを植えているので、これ以上の増収は期待できない。
・収量アップでは低タンパク化につながらない。いかに今の収量を減少させずにタンパク等品質を上げること、コストダウンすることが今後の課題。
・この位（510kg）がちょうどいい。

●その他・無回答……2名

Q3 Q2.で「考えている」とされた方へ。目標反収を教えてください。

●480kg（8俵）未満……2人
●480kg（8俵）以上540kg（9俵）未満……6人
●540kg（9俵）以上600kg（10俵）未満……6人
●600kg（10俵）以上660kg（11俵）未満……9人
●660kg（11俵）以上720kg（12俵）未満……7人
●720kg（12俵）以上……4人

Q4 コメ農家対象の戸別所得補償制度および米粉・飼料米等主食用米以外のコメ生産に伴う補助金助成制度が2010年度から実施される予定ですが、あなたはこの制度にどのような見解をお持ちですか？ またその理由は？

●賛成……13名
［その理由］
・基本的には賛成だが、販売農家すべてを対象とするのはいかがなものか。すべての補償制度、補助金に言えることだが、政策誘導を伴わないと死に金になる。補償対象を認定農家に限定するなど、どんな農家を育成するかも示すべきである。
・現在では再生産も不可能な状態であり、不安定なので期待を持ちたい。
・ＦＴＡが締結されるならば、欧米なみの戸別補償しかない。飼料用トウモロコシの代用としてのエサ米も必要では。

●反対……16名
［その理由］
・減反されないので、助成はされない。法人が赤字経営に助成されても、金融機関は貸出しないと思う。補償制度に迷わされず自力で頑張る。
・コメなど一番日本では楽に栽培できる作物に補償するよりも、水田でコメ以外の作物を作付することが大切。コメは余っているのだから。
・共産国ではないのだから、自分の努力が報われる社会を作らなければならない。

●どちらでもない……26名
［その理由］
・制度としては良いと思うが基準がどうなるのか心配。
・くれるというものはもらうが、本来強い農業、儲かる農業とはほど遠い。
・主食としてのコメの消費は低迷しているので、それ以外のコメ生産に取り組みやすい点は評価できる。しかし、戸別所得補償についてはこれまで私に委託してきた農家が再び営農するため契約解除する動きがある。
・本当にできればいいが、一般国民と同じように時給1,000円を農家に支払ったとしたら、10ａの生産費は20万円を超える。それが支払われればいいが、現実的にはできないだろうし、米粉の需要があれば補助金の出しようもないし、水利がキープされなければ水田をどう維持せよというのか。よく分からない。

Q5 戸別取得補償制度等、民主党政権が公約として掲げる農業政策は、あなたの農業経営にとって将来的にどういった効果（変化）をもたらすと思いますか？ またその理由は？

●良い効果が予想される……6名
［その理由］
・これまでより良い方向になるのではという淡い期待を持っている。
・生産コストを確保できる。

●悪い効果が予想される……19名
［その理由］
・農業一本で食っている専業農家からすれば、補償の対象にもなる兼業農家はズルい。農政は「農地」を守りたいのか、それとも「農業」を守りたいのか。このままでは農地を守る前に農業がなくなると思う。
・コメも十分世界と戦っていけるし、それによって強い農業ができると思う。内向きの政策は、赤字農家にとって有利だが、本来の政策は世界と戦っていく意欲のある農家に力を貸すべきものだと思う。

●ほとんど変わらない……15名
［その理由］
・自民党政権終期から国の政策に期待も持たなかったし、関係を持とうとは思わなかった。国の政策よりも身近な地域でどう農業を活かしていくかに関心がある。国の政策には期待できない。
・自分で作ったものは自分で価格設定して売るので政策に左右されるものではない。
・農政が今までうまくいったことはない。

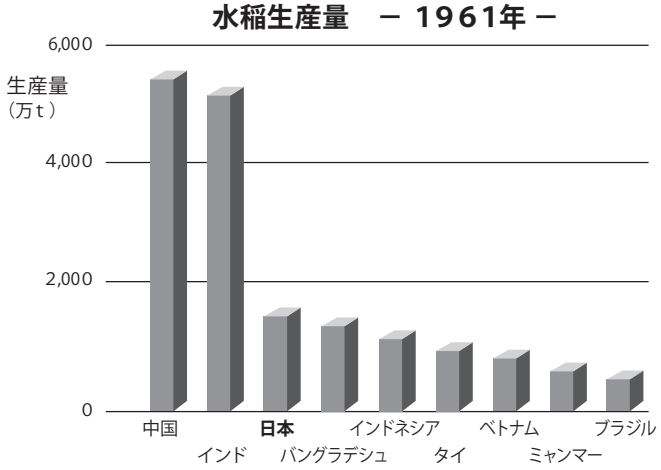
●分からない……15名
［その理由］
・まだ詳細がはっきりしていない。
・今のところ予想ができない。とりあえず貸しはがしに合わないことを祈る。自分の経営は市場を見て行なうので予想をしても仕方ないので予想しない。動き出したら柔軟に対応するつもり。

分析

FAO統計から分かった、日本のコメ生産量　低下の推移

FAO（国連食糧農業機関）は毎年、さまざまな農産物の生産量統計を発表している。編集部では、日本のコメ（籾米）の生産量に注目。統計初年度の1961年、生産調整が本格的に始まった1971年、バブル経済期を突入した1987年、そして最新の2007年に注目。すると、驚きの事実が！

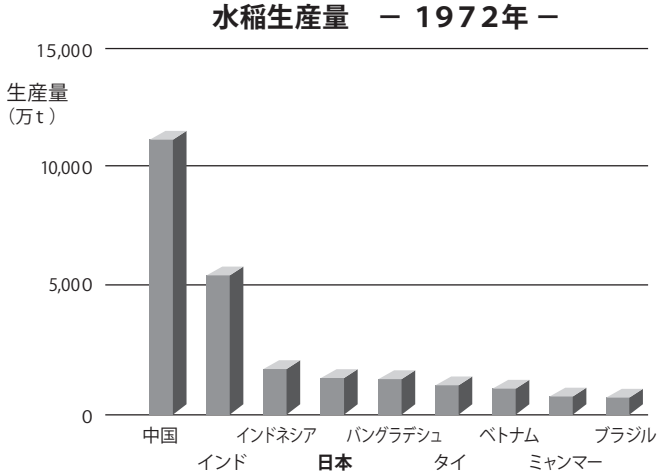
1961（昭和36）年　国内では農業の近代化が叫ばれる中、インド、中国に続く世界3位の生産量を誇る



【この年の各国のコメ生産量】
●1位：中国＝5,621万7,596t●2位：インド＝5,349万4,496t●3位：日本＝1,616万444t●4位：バングラデシュ＝1,442万6,184t●5位：インドネシア＝1,208万4,000t●6位：タイ＝1,015万t●7位：ベトナム＝899万7,400t●8位：ミャンマー＝683万4,100t●9位：ブラジル＝539万2,477t●10位：韓国＝467万9,000t

【農業をめぐる動向】
●1960年：農用原動機が2戸に1台普及。動力脱穀機、籾すり機も増える●1961年：業基本法公布、農業近代化資金助成法公布●1963年：国農民総連盟結成●1964年：肥料価格安定等臨時措置法公布●1965年：人力土付稚苗用田植機販売開始
【社会の動向】
●1960年：日米新安保条約成立。所得倍増計画が閣議決定●1961年：東ドイツ、ベルリンの壁封鎖

1972（昭和47）年　減反開始。コメ余り時代に突入した影響もあってか、インドネシアに抜かれ4位に後退



【この年の各国のコメ生産量】
●1位：中国＝1億1,642万8,568t●2位：インド＝5,886万7,952t●3位：インドネシア＝1,939万3,600t●4位：日本＝1,545万500t●5位：バングラデシュ＝1，513万3,678t●6位：タイ＝1,241万3,000t●7位：ベトナム＝1,074万8,200t●8位：ミャンマー＝735万6,800t●9位：ブラジル＝676万641t●10位：韓国＝649万6,000t

【農業をめぐる動向】
●1968年：農林業人口が労働者の2割にまで低下●1969年：政府が自主流通米制度を閣議決定●1970年：減反政策決定。農地法改正公布。この前後、乗用型トラクタ、田植機、自脱型コンバインの導入が急速に進む
【社会の動向】
●1971年：ドルショック●1972年：田中角栄、「日本列島改造論」発表

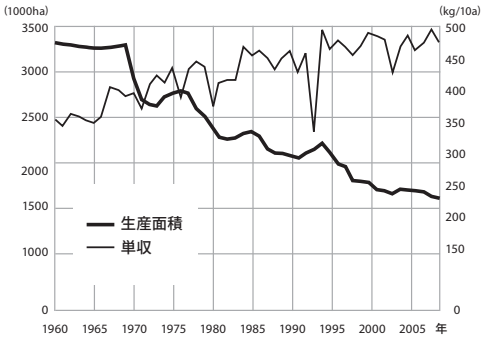
COLUMN

世界各国の反収はどうなっているのか

FAOの統計で驚かされるのは、日本のコメ生産量の低下もさることながら、中国とインドでのコメ生産の急増だろう。特に、世界最大のコメ生産国である中国の勢いはものすごいものがある。日本と同じ中粒種を生産している黒竜江省などの北方では年1回しか収穫ができない。しかし、言うまでもなく中国は国土は広い。地域によって稲作の形態も違えば、品種も異なる。南方ではインディカ米を年3回収穫が可能だからこそ、この生産量になっている。

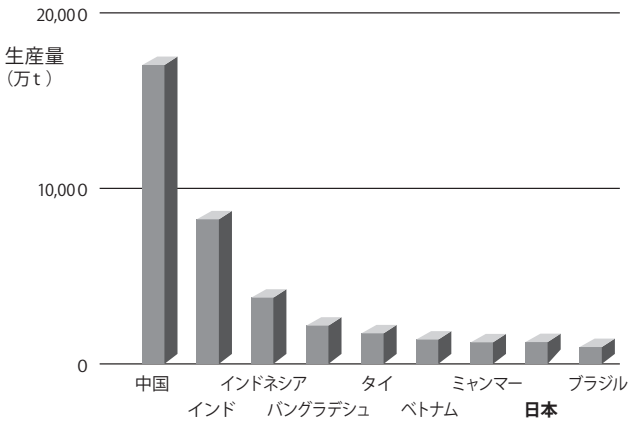
さて興味深いのは、反収である。九州大学大学院農学研究院・伊東正一教授が開設しているホームページでは「世界の食料統計」及び世界の穀物の国際価格を調べることができる。下に掲載したのが、日本の生産面積と反収である（註・ホームページ上では「単収」としてあるためそのままとした。また生産量等の数値は編集で単位を変更した）。反収が頭打ちとなり、生産効率が頭打ちとなっている現状がよくわかるだろう。ちなみに、生産量世界一を誇る中国はどうかといえば、2005年で反収約450kg。20年前は250kgに過ぎなかった。多収米を栽培していることを割引いても、生産効率が日本と遜色ないところに来ているのかもしれない。なお、米国は2005年の段階で日本とほぼ同じ約550kg、韓国480kg、オーストラリアは約700kgであった。米産業が世界に打って出ていくには、やはり増収によるコスト削減は不可欠であるといえるだろう。　　http://worldfood.apionet.or.jp/

生産面積と単収（精米換算）



1987（昭和62）年　牛肉・オレンジ輸入自由化の日米攻防の裏側で、生産減退傾向著しく

水稲生産量　－ 1987年 －

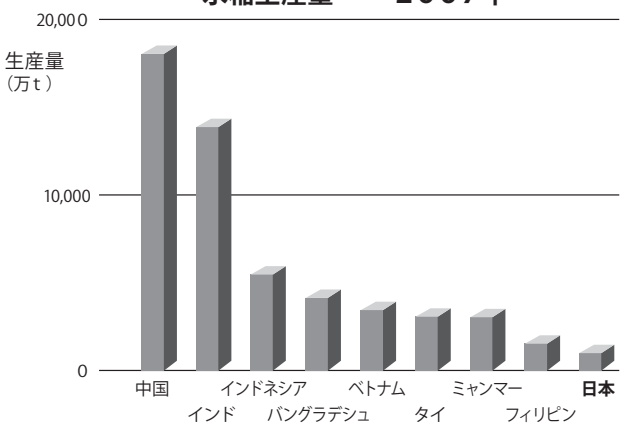


【この年の各国のコメ生産量】
●1位：中国＝1億7,666万2,482t●2位：インド＝8,533万8,704t●3位：インドネシア＝4,007万8,192t●4位：バングラデシュ＝2,312万624t●5位：タイ＝1,842万8,272t●6位：ベトナム＝1,510万2,600t●7位：ミャンマー＝1,368万8,400t●8位：日本＝1,328万4,000t●9位：ブラジル＝1,042万5,100t●10位：フィリピン＝853万9,852t

【農業をめぐる動向】
●1984年：日米農産物交渉、日本が牛肉・オレンジの輸入を増やすことで決着。農家戸数が450万戸を割ったことが判明●1985年：秋田食糧事務所、大潟村入植者3名を食管法違反で告発●1987年大潟村あきたこまち生産者協会設立●1988年：GATT理事会が日本の農産物輸入自由化を勧告

2007（平成19）年　世界9位に大幅ダウン 世界に冠たる収量も今は昔の物語に

水稲生産量　－ 2007年 －



【この年の各国のコメ生産量】
●1位：中国＝1億8,739万7,460ｔ●2位：インド＝1億4,457万ｔ●3位：インドネシア＝5,715万7,436ｔ●4位：バングラデシュ＝4,305万7,000ｔ●5位：ベトナム＝3,586万7,500ｔ●6位：タイ＝3,209万9,401ｔ●7位：ミャンマー＝3,261万ｔ●8位：フィリピン＝1,624万194ｔ●9位：日本＝1,089万3,000ｔ●10位：ブラジル＝1,106万700ｔ

【農業をめぐる動向】
●2002年：米政策改革大綱が決定●2003年：改正農薬取締法施行。コメ、1993年以来の不作●2004年：京都で鳥インフルエンザ発生。世界イネ会議開催●2005年：有機農業推進法案成立。都道府県で遺伝子組換え作物栽培規制する動き広まる●2007年：バイオエタノール生産が本格化●2008年：原油高騰にともなって化学肥料価格が上昇。穀物価格が急騰

事例紹介 コストを掛けて減収させられる〝愚かさ〟に気づけ

まだ「品質と収量は両立するのが難しい」と考えている方もおいでであろう。しかし、その難しい問題をやすやすとクリアした方がいる。平野廣明氏（新潟県新潟市）だ。いかにして平野氏は増収し、増益を実現させたか？　成功の鍵は、自らデータを取りながら検証していったことにあった。

新潟市北潟で22haの稲作経営者平野廣明氏（56歳）。その他、8haの作業請負もこなすが、労働力は奥さんと2人だけ。地域のBLコシヒカリの平均収量は8～9俵。だが、平野氏の収量は全面積平均で12俵前後。ちなみに、平野氏はBLではなく従来のコシヒカリを作っている。新潟県では食味を維持するという理由から8俵を目標にした指導をしているが、コメ業者は競って平野氏の米を求めてくる。12俵をとる平野氏の食味評価が高いからだ。平野氏の販売価格は地元相場の1俵1万5000円、皆と同じ値段だ。でも、4俵の増収だからそれだけで他の人より10a当たりで6万円利益が多い。しかも肥料は窒素成分にして1・5kg。リン酸、カリはゼロだ。

「やっていることは、昔ながらのこと」だと言う、平野氏の経営観と技術をあらためて聞いた。なお、平野氏は2004年の9月号で「スーパー読者の経営力が選ぶ　あの商品この技術」というコーナーに登場している。本誌の定期購読者にはネット上でバックナンバーを閲覧が可能なので、併せてご覧いただきたい。

ひこばえの出るコメは不味い

「早生品種はともかく、通常品種ならひこばえの出る稲作りではコメの食味は上がらないよ」

収量と食味の関係について話が及んだ時、平野氏はそう言った。言われて平野氏の収穫後と他の水田を見比べて驚いた。周辺の田はことごとくひこばえが出ているのに、平野氏の田は刈り取ったままの稲株が枯れ上がったままだ（写真①②）。

ひこばえは地力のある田や暖地だから出るのだと思っていたが、

「肥料が過剰だからであり、それが食味を落とす」と平野氏はいう。先述の通り平野氏の施肥は窒素単肥で1・5kgだけ。それも元肥ゼロのいわゆるV字稲作だ。

「過剰ではなく、足りるだけの栄養を吸収させ、稲の命をきちんと全うさせてやれる田を作り、施肥量は必要最小限すること。肥料で増収するわけではない」

実をつけるとは、次世代を残すということ。稲をきちんと死なせる稲作りが健全な子実をもたらす。だから食味も上がるというわけだ。そんなひこばえが出ないほどに肥料を限定的にしている平野氏は、春に元肥はやらないが、肥料分を使いきったと思うような田には3年に1回くらい秋起こしの前にお礼肥えを施す。

食味計を新潟県では経済連と同時期に2000万円も投資して購入したという平野氏は、作業を請け負っている農家の米の食味値を出して情報提供している。お客さんへの情報提供というだけでない。食味のチェックを含めて、地域の農家の作業を





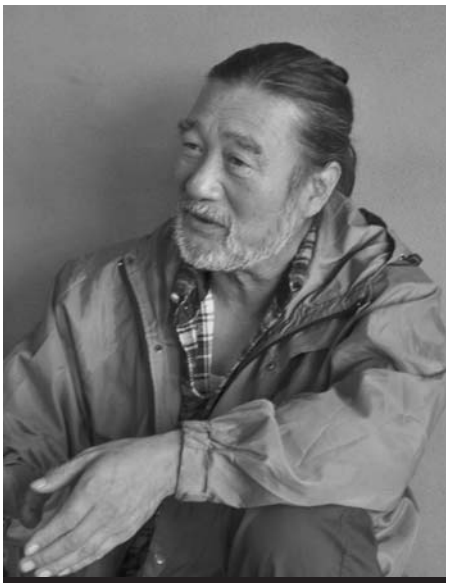
❶ひこばえのまったく出ていない平野氏の田。❷周辺の田。平野氏は、早生種でもないのにひこばえが出るのは過剰施肥の結果で、それでは食味は上がらないという。❸肥料分はその作毎に使いきる地力でこそ増収も可能に。3年に一度位、秋にお礼肥えをやる。

請け負うことでその土壌管理のレベルが分かり、栽培方法と収量や品質の差を検証する貴重な情報源にするそうだ。

「今年は初夏の日照不足で不作基調だったが、そんな年だからこそ収穫量も食味も地力の違いがはっきり出ている。8俵より10俵とってる人の方が食味値が高い。とれないのは田んぼを作らないで肥料をやり過ぎているから。それに有機神話に踊らされているね。BLコシで減農薬だなんて、取り返しの付かないだめな土地になる場合があるよ。そんな人に今年は稲こうじが蔓延している。BLはイモチには抵抗性があるかもしれないけど、過剰施肥の結果で稲こうじが出ているんだよね。あれ使え、これ使えと言われて高い資材使ってコストを上げ、その上、減農薬で8俵どころか等外のコメ作ってる。それでどう経営が成り立つのかね。原価かかって収量が少ないからって所得補償かい、笑っちゃうよね」

平野氏がかかわる農家に対するアドバイスは地力の無さについてのことがほとんどだというが、稲作りのプロとしての自覚がないことが最大の問題だという。

「湿田地帯のここで地力がないなんてのは、もともとあったものを、いじり壊してるだけだよ。農家は馬鹿だから、ちょっといい先生が来て、これはいい物質が入っていてものすごく稲の根を活性化するとか言われちゃうと、試しもしないで全部やっちゃうんだよ。一般の企業なら、裏付けるデータがないとやらないよ。たとえあっても、自分の圃場に合うかどうか試して調べるのがあたりまえだろ。湿田条件であれば光合成細菌も悪くないかもしれない。過剰施肥の結果で出るような病害には効果があるよ。水が腐りやすいような田ではね。でもね、人に聞いた話を真似るのではなくて、自分で試し、データを取りながら検証しながら稲や田んぼの生理を確認していくようにならない限り、農家は指導に振り回されて行くんだよね」



平野 廣明氏

新潟県新潟市
平野農場

1989年にエム・エス・ケー東急機械（現・エム・エス・ケー農業機械）を退職後、就農。圃場機械のほとんどは自ら改造を重ねたもの。経営面積約22ha。販売は独自ブランドの玄米と精米を新潟県内の米店に出荷するほか、全国の個別の顧客にも販売している。

湿田を乾田化する必要などない

平野氏は71年頃に新潟市の中心部から現在の場所に移転してきた。土地の集積もさることながら、あえて湿田を選んだ。

「湿田はコメ作りには最高の場所だと思う。なんで本来、稲が好む湿田という条件を変えなきゃならんの。たしかに、乾田化していた方が機械も使いやすいかもしれないし、安定した減水深も得られやすいかもしれない。でも、工夫次第でそれはどうにでもなる。肝心なのは、根が健康で硬盤の下まできちんと伸びていくような状態を確保することが肝心なんだよ。水は縦浸透だけでなく、土中で横にも移動するし表面の水だって移動する。要はきれいで酸素をたくさん含む水が自由に移動する条件を作ること」

そう話す平野氏だが、同氏の圃場も放っておけば湿田ゆえにガス沸きはひどくなるという。その対策については後で紹介するとして、氏がプラウにこだわっているのはなぜか。

「20数年前、稲刈りの後に田の表面に何本かの溝を切ってみた。すると、





❹❺「湿田こそが理想の水田だ」と語る平野氏だが、プラウを使う。使用しているのは12インチ×7連の水田リバーシブル。ただし、接地輪は車輪をクローラに付け替えている。そのほうが、湿田作業で耕盤が一定になりやすいという。写真の圃場はプラウをかけて表面は乾いている。しかし、平野氏は湛水状態で冬を越させる。土は湛水状態でも地力をあがるという。

翌年の稲で溝を掘った場所の色が濃い。次の年、田を3つに分け、父が持っていたプラウ、ロータリそれに水張りだけをした区を設けて比較してみた。するとプラウの効果がてきめんに出た」と言う。

溝切りをしただけの時、土が乾いたわけでもない。溝には水が溜まったままだったが、それでも翌年の田にはその溝の通りに地力の差を示す筋ができたそうだ。乾土効果という言葉があるが、土は乾かなくとも土を動かす、あるいは水を動かすことで土が酸化され、地力を発現させる効果があるのかもしれない。

今回訪ねた折にも数日前にプラウをかけたという田を見た。表面は乾いている。でも、平野氏はプラウ後に水があっても良いという。しかし、プラウ耕は秋である必要があるとか。湿田の平野氏の田でも一瞬でも表面は乾く。でも、乾かすこと自体は目的ではないのだ。

秋に深部の土を上にあげる。さらに、上下だけでなく土の移動量の大きなプラウで耕すことは田の土質を一定にする効果もある。だから完全な反転耕でなくても良いのかもしれない、と平野氏は考えている。

雪国の農家でプラウを使う人の多くは「秋起こしにすると雪のために、春の土の乾きが悪くなる」と言うが、平野氏は秋起こしにこだわる。同氏の農法は乾田化ではなく水田の水を生かす農法だからだ。雪の下に埋もれるが、氏の田は冬季に湛水状態にあるのだ。

平野氏は、12インチ7連の水田リバーシブルプラウを使うが、5本爪のプソイラDXも使っている。ただし、同氏のプラウやプラソイラは接地輪を車輪からクローラ型のものに変えている。その方が耕深が安定するからだそうだ。

春に水を落とし、表面が乾いた時を狙ってレーザーレベラあるいはバーチカルハローで表層を均平・砕土・鎮圧する。そのまま無代掻きで田植えすることもある。バーチカルハローを使う時期も、乾いたと言っても表面だけ、深部には水を含んだ状態のままである。土練りを心配する筆者に、平野氏は面白そうに話す。

「クローラにバーチカルハローをつけて表面だけをスピードを上げて砕土する。そうすると表面は乾いていても、クローラの走行でクローラの下から水が噴き出すこともある。でも、バーチカルハローの部分では土埃が上がっている。だから土練りはない。そういう状態のできる圃場条件を作り、前作業をし、作業方法を工夫すればよいだけ。だから雪国の水田でも俺の場合はプラウ耕は秋だし、その方が稲作りにとっては良いと思う」

トラクタは湿田であることを前提にしているので基本的にクローラタイプ。ぬかるんだ水田をこねまわすような作業はトラクタでもコンバインでもしない。

「水と遊ぶ」稲作り

湿田でのガス沸きを防ぐためには、土壌中でいつでも水が停滞し酸素不足にならないような田にすること。表面水や縦方向の水の動きだけでなく、土中で横にも水が移動できるような状態を作る。そのためにはまず水の豊富さが肝心で、同氏の田の一画には池が掘ってあり、水不足の時にはその水も使う。それに、表面の溝切り。といっても乗用管理機で田の中を走るだけだ。溝は排水路につながっているわけでもない。それ以上に、表面水も常に動くような状態を作る。平野氏の圃場は大きなものは2・5ha以上ある。段差のある田を自分で一枚にした。だから、まだかなりの高低差がある。でも、水がたくさんあり、それを自在に使うことで高低差のある田でも、雑草を抑制でき、低い場所の苗も丈を伸ばさせることはできるという。

ガス沸きの原因になるワラは走行部をクローラに変えたロールベーラで持ち出し、堆肥化して使う。まさに、平野氏の農法はまさに「水と遊ぶ」稲作りというべきだろう。

そんな平野農法の考えを表した自作の試作農機が写真⑩である。大きなドラムに沢山の棒がつけられており、移動することで田に縦方向の穴を作って行くもの。最初はユンボの





❻プラウをかけない場所は5連のプラソイラDXで秋起こしする。この場合も、接地輪を車輪から三角形のクローラに代えている。やはり耕盤を一定にするためだ。❼砕土・整地・均平・鎮圧のためのレーザーレベラ。

先端作業機として作り効果を確かめてから今回の試作に至ったものだ。

そんな平野氏は、現在の農業のありかたについてこう語る。

「よくコストダウンなんて言うけど、その前にまず増収だろう。その技術がある農家ならわかるが。作れもしないで何がコストだ。専業の百姓なら1日2、3回圃場を見ろよ。朝と夕方で何が違ってるのか、なぜ違ってるのか、自分の田のことを説明できる人がどれだけいる？だから、自分が使う技術の評価もできない。まずはそこからだよね。元肥主義、多肥栽培、その上で、倒伏するから倒伏軽減剤、様々な防除剤だと…。なんでその技術を疑わないのだろう。それは所詮、田植機を普及させるための施肥であり、農民に資材を沢山使わせるだけの技術じゃないのか。俺がやっているのは、そんな資材や機械に頼る術のなかった時代に昔の人が土や田や稲のことを考え抜いた方法を現代化し、さらに発展させたもの。だから、新しいことやっているわけじゃないんだよ」

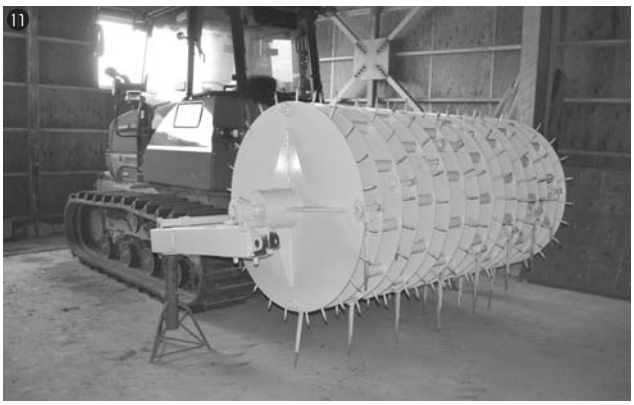
「湿田こそ多収と良質米の条件」と語る平野氏とその技術。多くの読者にとって平野氏と条件は異なるはず。しかし、答えを教えてもらう作業員のような農家になっている限り増収も利益も無い。まずは、権威や教えられた知識あるいは答えに頼るだけではなく、自らデータを取りながら検証し、自らの方法を作り上げていくことの大事さを語るのである。

減反政策が始まって、約40年。増収することより、収量を減らすほうが〝褒められてしまう〟稲作指導が当たり前になってしまった。その経営観の異常さをもう一度考え直してみようではないか。

（昆吉則）











❽レーザー受光器を付けたバーチカルハロー。砕土・整地の基本作業機はバーチカルハローだ。表面の土が乾燥した時にクローラトラクタで高速作業する。そのため、バーチカルハローで砕土される場所からは土埃があがるが、クローラによって土中の水分が噴出すようなこともあるそうだ。でも、そう押した作業でも土を練るようなことは無い、と平野氏は話す。その作業条件作りや作業方法を併せて現地で見て学ばなければ、下手に真似はできない。

❾施肥と溝切りに使う水田管理機。溝切りといっても溝切り器を使うわけではない。ただ、車輪で走りまわるだけ。それで効果は十分だそうだ。

❿平野氏は今年試作した水田用作抗機。クローラトラクタに装着して使うもので、大きなドラムにハリネズミのように40cm.くらいの太い針が沢山付けられたもの。作抗用の太い針は機体の下方に来ると直立固定され、地面深く差し込まれる仕組み。サブソイラではなく、これで、伝面に無数の縦穴を付けていき、水の縦浸透をさせる。

⓫それに先立ってユンボの先端作業機として田に縦抗を作る作業機でテストを重ねていた。こんな作業機を自作してしまうところに、平野氏の田と水、そして水を移動させる田作りへのこだわりが見える。

⓬これも手作りの水稲直播機。今年は苗がなくなったから、播種量1.5kg相当で30a作ったが十分な収量を得た。直播きも作土作り次第だという。